

ドイツにおける持続可能な開発のための教育の 10 年 (DESD) 認定プロジェクトの現状分析

金戸 哲*, 佐藤 真久**, 小堀 洋美**

KANETO Tetsu*, SATO Masahisa*, KOBORI Hiromi*

*東京都市大学大学院環境情報学研究科, **東京都市大学環境情報学部

〔要約〕本研究は、ドイツ DESD 認定プロジェクトの現状を把握する事を目的に、公式報告書を中心に文献のレビューを行なった。その結果、ドイツ DESD 認定プロジェクトには以下の 5 つの特徴が認められた。それは、(1) 国内実施計画及び国際実施計画の反映、学校外教育活動の多様なステークホルダーとの協同的实施、(2) 円滑なコミュニケーション手法としての参加型アプローチの採用、(3) 地域の状況や地域の優先事項の尊重、(4) 持続可能性の 3 領域と活動実施の関連付け、(5) ドイツ DESD 国内委員会が提示する年次テーマを活動の内容開発へ反映する事、であった。さらに、ドイツ DESD 認定プロジェクトを、国際的議論に基づく「ESD の 10 の視点」(佐藤ら, 2008) から検討すると、4 つの視点で一致が見られた。今後、ドイツ DESD 認定プロジェクトにおける各活動を ESD の 10 の視点から詳細に検討するためには、事例研究を実施する必要があると考えられる。

〔キーワード〕ドイツ, ESD, ESD の 10 年 (DESD), 環境教育, 学校外教育

1. はじめに

2000 年代、国際・地域レベルにおいて、「持続可能な開発のための教育 (ESD)」の重要性が高まっている。2002 年、国連が 2005 年から 2014 年を「持続可能な開発のための教育の 10 年 (DESD)」と宣言した。この DESD に協調し、2005 年に UNESCO が主導機関として「DESD-国際実施計画 (DESD-IIS)」を策定した。この計画下で、国連欧州経済委員会 (UNECE) は、欧州レベルでの ESD 地域戦略を策定してきた。これらの ESD 戦略構築により、ESD の重要性が国際・地域レベルで高まっている事がうかがえる。

この欧州地域において、ドイツは早期から環境教育を実施し、ESD 推進のためのリーダーシップを取りながら、1990 年代後半から国内において ESD を実践してきた。とりわけ 1998 年には連邦・諸州教育計画研究助成委員会 (BLK) が「BLK プログラム 21」を開始した。このプログラムの基本構想は、公教育制度における普通学校のカリキュラムに ESD を統合する事であった。その結果として、15 州、約 200 校、1000 名の教員、65000

名の児童が本プログラムへ参加し、現在「BLK プログラム 21」が公教育領域における新しい環境教育・ESD プログラムとして認識されてきた。

そして 2000 年代、ドイツの国家・国際機関が ESD を推進してきた。2002 年、ドイツ連邦教育研究省 (BMBF) が最初の ESD の報告書を発表し、加えて 2003 年には、ドイツ UNESCO 国内委員会 (DUK) が、DESD の中心的目標を伴った基準となる重要な文章、「ハンブルグ宣言」を採択した。2004 年 3 月には DUK がドイツにおいて DESD 国内委員会を招聘し、同年 5 月にはドイツ国会において州政府の持続可能性戦略の一部として、DESD の国内実施計画の開発を始める事が全会一致で採択された。

これらのイニシアティブに伴い、多様な教育領域の中で ESD の協同的活動の重要性が高まった。2005 年、「BLK プログラム 21」の継続プログラムとして「Transfer21」が公教育領域で開始し、同時に多様な教育領域における ESD 活動を推進する目的で、ドイツ UNESCO 国内委員会がドイツ DESD 認定プロジェクトを開始した。

2. 研究目的

本研究では、多様な教育領域での ESD 活動を対象としたドイツ DESD 認定プロジェクトを対象として、その現状を把握する事を目的とする。この現状把握に基づき、国際的議論に基づく ESD の要素抽出と特徴把握を通じ、ドイツの ESD 活動のあり方に検討を加える。

3. 研究方法

本研究では、主にドイツ DESD 認定プロジェクトの公式報告書「Learning Sustainability UN Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) Stakeholders and Projects in Germany」を中心に詳細な文献レビューを行ない、実施主体、教育レベル、活動領域、の 3 つの側面からドイツ DESD 認定プロジェクトの傾向を分析し、現状把握を行なった。また、ドイツ DESD 認定プロジェクトの現状を分析するにあたり、佐藤ら(2008)によって提示されている「ESD の 10 の視点」を利用した(表 1)。

表 1 ESD の 10 の視点とそのキーワード

10 の視点	キーワード*
(1) 相互関連性の認識	- 環境的、社会的・文化的、経済的な問題の相互関連性・相互依存関係について理解を図る「事象間の関連性の認識(つながりの認識)」 - 多様な組織・ステークホルダー間の連携、世代間・世代内の関わりといった「主体間の関連性の認識(かかわりの認識)」
(2) 活動の文脈化	- 精神的、文化、歴史と関連付けた「地域的な文脈化(深まりの認識)」 - グローバリゼーションや市場経済と関連付けた「世界的な文脈化(ひろがりの認識)」
(3) 持続可能性の原則と概念の構築	- 生態学的持続可能性、社会的公正、文化的・精神的持続可能性 - 進展していく持続可能性という概念の本質に対応 - 協同的・価値創造型の学習・教育実践の重要性
(4) 環境倫理と多様な価値観の尊重	自分自身の価値観、社会の価値観、世界中のさまざまな人々が有する価値観を理解

	- 自分自身の価値観を認識する技能、個人の価値観を持続可能性という文脈のなかで評価する技能 - 地域に根ざし、文化的にも適切な価値観を創造する事
(5) 多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学び	- システム思考、未来志向型思考、批判的思考、課題解決能力 - 参加型、対話型の学習と教授による協同的で価値創造型の「知の獲得・連結」 - 時間軸や相互関連性の認識、理論と実践の反復(アクション・リサーチや参加型評価)
(6) 多様な教育領域での実践とかかわり	- 持続可能な開発のための 4 つの目的: (1) 質の高い基礎教育へのアクセスを向上させる, (2) 既存の教育プログラムの新たな方向付け, (3) 人々の理解と認識の向上, (4) 訓練の提供 - 公教育, ノンフォーマル教育, インフォーマル教育(+職業教育)における実践と関連性
(7) 協同アプローチと能力開発	- 効果的コミュニケーションと協同アプローチ - リーダーシップとコーディネーション - 個人のみならず、組織能力や市民能力の開発
(8) 社会における学びの仕組みと生涯学習体系の構築	- 基本的人権としての「学習へのアクセス」 - 学習理念: (1) 知ることを学ぶ, (2) 為す事を学ぶ, (3) 共に生きる事を学ぶ, (4) 人間として生きる事を学ぶ - 変容する事を学ぶ - 個人と社会が変容するための学習を意識化
(9) 国際的な教育イニシアティブとの連関	「持続可能な開発と教育」と「基礎教育の質の向上とアクセスの改善」 - 質の高い基礎教育 「ミレニアム開発目標(MDGs)」のプロセス、国連識字の 10 年(UNLD)の運動、万人のための教育(EFA) - 持続可能な開発という概念が教育の範疇を越えて、社会や制度の枠組みのあらゆる側面に影響を及ぼす
(10) 現実的な社会転換	変容を促す教育

*佐藤ら(2008)から抜粋したキーワード

佐藤ら(2008)の指摘する「ESD の 10 の視点」を本研究の分析へ利用する理由は、国際的に見

でも、ESD の視点を俯瞰的に整理することがほとんどなされていない中で、同「ESD の 10 の視点」は、今日の ESD の議論を踏まえ、体系的な視点を提示しているものであり、現時点で ESD 活動を考察する枠組みとして、最も参考になると考えられるからである。

4. ドイツの DESD 認定プロジェクト

4.1 公式報告書に基づく文献レビュー

ドイツ DESD プロジェクトとは、公教育・学校外教育といった多様な教育領域を対象に、「ドイツ DESD 国内実施計画(2005)」に基づき、DESD 国内委員会から 2 年間有効な認定を授与した ESD の革新的事業である。本認定プロジェクトは、多様な教育領域における ESD の協同的活動を促進する事を目的としており、現在、約 800 の活動が本認定プロジェクトとして承認されている。

この承認について、高雄(2009)は、ドイツにおける ESD 活動のポータルサイトの分析を通じて、ドイツ DESD 認定プロジェクトの認定基準を表 2 に示す 4 つの項目に分類し、6 つの要素を提示している。

表 2 ドイツ DESD 認定プロジェクトの認定基準

項目	認定基準
国家的目標	国内実施計画の 4 つの戦略目標のうち、最低 1 つに関連する事
教育的措置	ESD 的な教育を満たしている事。つまり、(1)現在と将来の生存価値の積極的な形成のために必要な能力(コンピテンシー)を育成する事、(2)参加的な考え方に配慮する事、(3)持続可能性の 3 領域(環境、社会、経済)の最低 2 つを含む事
広がり	- 外部への広報、現時点でのアプローチ可能な人数、将来アプローチされるべき人数などを説明する事 - 最低でも 1 つの地域的な有効エリアを持つ事
成果	- 最低 1 つの具体的成果物がある事 - 持続可能な発展のために必要なポジティブな成果(意識形成、資源節約など)が詳述されている事

高雄(2009)に基づき筆者作成

ドイツ DESD 認定プロジェクトでは、「ドイツ DESD 国内実施計画(2005)」の 4 つの目標、(1)活動の発展と集約、よい事例の広範囲への発信(モデルプロジェクト)、(2)ESD の関係者間のネットワーク化、(3)ESD の一般の人への認知の向上、(4)国際的な協力の強化、のうち少なくとも 1 つの目標を含む必要があると指摘されている。このことから、本プロジェクトの特徴として、表 2 に示す国家規模の戦略をプロジェクトへ反映させる重要性が強調されている事を挙げる事ができる。

一方、本認定基準における「教育的措置」の項目では、ESD としての教育的措置を尊重している。この認定基準の中で、(1)現在と将来の生存価値の積極的な形成のために必要な能力育成、(2)参加型アプローチ、(3)持続可能性の 3 領域(環境、社会、経済)間の関連性を尊重することの重要性が指摘されている。加えて本認定基準の「広がり」の項目では、外部への広報、アプローチ可能な人数、すなわちステークホルダー間の協力が示され、地域的文脈の尊重が示された。そして認定基準の「成果」の項目では、具体的な結果とともに現実的な社会転換に向けた社会的影響を提示している。総じて、これらの基準では、DESD-IIS の記述との連動がうかがえる。

これらの認定基準による特徴に加えて、ドイツ UNESCO 国内委員会による公式報告書「Learning Sustainability UN Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) Stakeholders and Projects in Germany」(Leicht, *et al*, 2006)に基づく文献調査の結果から、いくつかの傾向が見られた。第一に、多様な活動テーマの領域が実践に包含されている事が明らかになった(Box.1)。この主要な要因は、ドイツ DESD 認定プロジェクトの認定基準において、持続可能性の 3 領域の内 2 つが、活動の実施に関連付けられている事、が挙げられる。もう 1 つの理由としては、一般市民の参加を促し、実施主体間の連携を生み出す事を目的として、ドイツ DESD 国内委員会が年次テーマを設定している事が挙げられる。

Box.1 ドイツ DESD 認定プロジェクト 活動領域一覧

1. 環境保護(111), 2. 未来(110), 3. 気候(100), 4. エネルギー(96), 5. 消費習慣とライフスタイル(92), 6. 参加(90), 7. 天然資源と管理(85), 8. グローバリゼーション(85), 9. 政治的持続可能性(75), 10. 水(75), 11. 生物多様性(73), 12. フェアトレード(70), 13. 異文化間学習(66), 14. 文化的多様性(65), 15. 食(61), 16. 森林(58), 17. 健康(58), 18. ローカル・アジェンダ 21(57), 19. 世代間公平(53), 20. 社会的コミットメントとボランティア(51), 21. 交通と輸送(48), 22. 貧困の削減(48), 23. 倫理(47), 24. 企業の責任(43), 25. 評価(42), 26. 都市・農村開発(40), 27. 人権(39), 28. ジェンダー(38), 29. 研究(36), 30. メディア(35), 31. 住まい(34), 32. 移民(34), 33. 農学(32), 34. 平和(29), 35. 芸術(25), 36. インターネット(25), 37. 生徒企業(22), 38. 技術(20), 39. 宗教(17), 40. ボランティア年(17), 41. 金融(消費者)教育(14), 42. スポーツ(11)

Leicht, *et al.* (2006) に基づき筆者作成

※括弧内はプロジェクト数

次に図1は、ドイツ DESD 認定プロジェクトの活動領域に対するプロジェクト数を示す。図1の活動領域の番号は Box.1 の番号と対応している。図1より、上位10の活動領域(括弧内はプロジェクト数)は、1. 環境保護(111), 2. 未来(110), 3. 気候(100), 4. エネルギー(96), 5. 消費習慣とライフスタイル(92), 6. 参加(90), 7. 天然資源と管理(85), 8. グローバリゼーション(85), 9. 政治的持続可能性(75), 10. 水(75), であった。この中で、1. 環境保護(111)や 7. 天然資源と管理(85), 2つのテーマを採用した ESD 活動を実施している事が明らかになった。これらの関連性の高さは、ト部(2009)が指摘する「Bolscho *et al.*, (2007) による『資源の過剰利用に伴う環境破壊』という問題が ESD の基本問題として設定されている」事と合致する。この事から、本プロジェクトも、ドイツにおける ESD 活動の基本問題の設定に関する傾向と一致している事がうかがえる。

また多くのプロジェクトが 2. 未来(110)のテーマを採用している事が示されており、ドイツ DESD 認定プロジェクトの認定基準における、「現在と将来の生存価値の積極的な形成のために必要な能力を育成すること」の項目を反映させた結果である事がうかがえる。

さらに 6. 参加(90)が多く見られたことから、ドイツ DESD 認定プロジェクトの認定基準における「参加的な考え方に配慮すること」が実際の活動に反映されている事がうかがえる。

そして 10. 水(75)が多く見られたことは、2008年の年次テーマとして「水」が選出され、それによって「水」をテーマにした教育内容の開発が進められたことをうかがわせている。

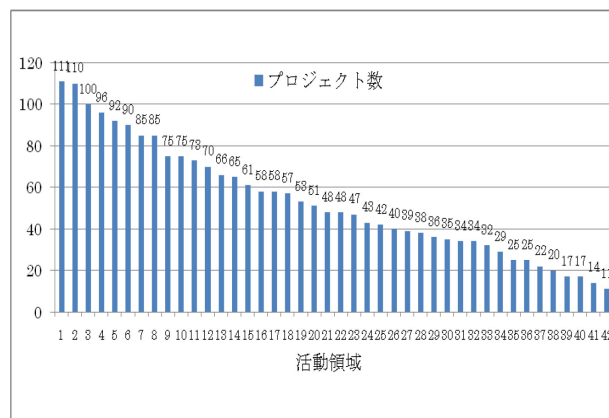


図1:ドイツ DESD 認定プロジェクト
活動領域に対するプロジェクト数

(Leicht, *et al.*, 2006) に基づき筆者作成

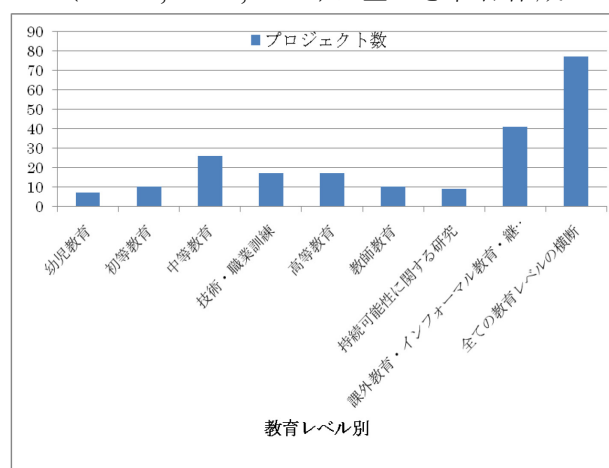


図2:ドイツ DESD 認定プロジェクト
教育レベル

(Leicht, *et al.*, 2006) に基づき筆者作成

図2は、ドイツ DESD 認定プロジェクトの教育レベル別のプロジェクト数を示している。プロジェクト数は多い順に、全ての教育領域の横断(77), 課外教育・インフォーマル教育・継続教育(41), 中学校(26), 高等教育(17), 技術・職業訓練(17), 小学校(10), 教師教育(10), 持続可能性に関する研究(9), 幼児教育(7)である事が明らかになった。図2より、ドイツ DESD 認定プロジェクトの活動の多くが全ての教育レベルを横断する形で実施されている事が明らかになった。その理由としては、本プロジェクトの認定基準において、現時点でのアプローチ可能な人数、将来アプローチされるべき人数などを説明する事、参加型の考え方に配慮する事、そして最低でも1つの地域的な有効エリアを持つ事、が挙げられる。これらの認定基準が、プロジェクトへ多くの学習者や企画立案者を含む地域のステークホルダーを巻き込む事につながり、結果として1つの教育領域だけでなく、多様な教育領域を含む活動の実施につながっていると考えられる。

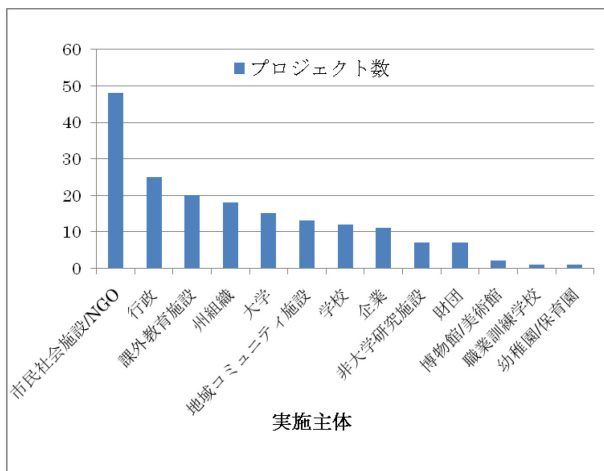


図3:ドイツ DESD 認定プロジェクト
実施主体

(Leicht, et al., 2006)に基づき筆者作成

さらに、図3はドイツ DESD 認定プロジェクトの実施主体のプロジェクト数を示している。プロジェクト数は多い順に、市民社会施設及びNGO(48), 行政(25), 課外教育施設(20), 州組織(18), 大学(15), 地域コミュニティ施設(13), 学校(12), 企業(11), 非大学研究施設(7), 財団(7), 博物

館及び美術館(2), 職業訓練学校(1), 幼稚園及び保育園(1), となっている。ドイツでは、多様な市民社会施設と NGO による学校外教育での ESD 活動が主にドイツ DESD 認定プロジェクトの下で実施されていた事が明らかになった。

以上の分析の結果、以下の5つの傾向が認められた。(1)学校外教育活動が美術館、ビジネス、産業、社会学習施設、政府高官等の多様なステークホルダーと共同しながら実施されている事、(2)参加型アプローチが円滑なコミュニケーション手法として採用されている事、(3)地域の状況や地域の優先事項が尊重されている事、(4)持続可能性の3領域の内2つが、活動の実施に関連付けられている事、(5)ドイツ DESD 国内委員会によって提示された年次テーマ領域がこの活動の内容開発に反映されている事、が挙げられる。

4.2 「ESDの10の視点」からの分析

これらの結果に基づき、佐藤ら(2008)による「ESDの10の視点」から検討すると、ドイツ DESD 認定プロジェクトが、(1)相互関連性の認識、(2)活動の文脈化、(5)多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学び、(6)多様な教育領域での実践とかかわり、以上4つの視点と関連性を持つと考えられる。

初めに、(1)相互関連性の認識からは、ドイツ DESD 認定プロジェクトが、『環境的、社会的・文化的、経済的な問題の相互関連性・相互依存関係について理解を図る「事象間の関連性の認識(つながりの認識)」』や、『多様な組織・ステークホルダー間の連携、世代間・世代内の関わりといった「主体間の関連性の認識(かかわりの認識)」』を尊重する傾向にあることが指摘できる。とりわけ、持続可能性の3領域との関連性の尊重の点や、多様なステークホルダー間の連携及び現在と将来の生存価値の積極的な形成のために必要な能力育成の点で共通点が見られた。

次に、(2)活動の文脈化からは、ドイツ DESD 認定プロジェクトが『精神性、文化、歴史と関連付けた「地域的な文脈化(深まりの認識)」』や『グ

ローバリゼーションや市場経済と関連付けた「世界的な文脈化(ひろがりの認識)」』を尊重している傾向が見られた。とりわけ、有効な地域を有する事や地域的文脈の尊重を重視している点で共通点が見られた。

3 つ目の(5)多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学びからは、ドイツ DESD 認定プロジェクトが参加型、対話型の学習を尊重している傾向が見られた。本認定プロジェクトの認定基準において、参加的な考え方を考慮する事が示されている事がうかがえ、(5)多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学びとの共通点が見られた。

最後に、(6)多様な教育領域での実践とかかわりからは、ドイツ DESD 認定プロジェクトが公教育、学校外教育及びインフォーマル教育間の協働を尊重している傾向が見られた。とりわけ、(6)多様な教育領域での実践とかかわりの視点は、ドイツ DESD 認定プロジェクトで、全ての教育領域を横断して活動をしている団体が多いという点と強く関連していると考えられる。

5. 考察と結論

総じて、公式報告書を中心に文献レビューを実施した結果、ドイツ DESD 認定プロジェクトの ESD 活動にいくつかの傾向が見られた。本プロジェクトの ESD 活動は、参加型アプローチを含む多様な教育手法を活用し、持続可能性の3領域間及び多様なステークホルダー間の関連性を尊重しながら、地域で実施する傾向にある事が明らかになった。加えて、これらの傾向を佐藤ら(2008)による「ESD の 10 の視点」と照らし合わせた結果、(1)相互関連性の認識、(2)活動の文脈化、(5)多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学び、(6)多様な教育領域での実践とかかわり、以上 4 つの視点との一致が見られた。

今後、ドイツ DESD 認定プロジェクトにおける各活動を佐藤ら(2008)による「ESD の 10 の視点」から詳細に検討するため、事例研究を実施する必要があると考えられる。それを実施する事により、

佐藤ら(2008)による「ESD の 10 の視点」の間における関連性及び ESD の進展プロセスを見る事が出来るだろう。また、佐藤ら(2008)による「ESD の 10 の視点」も ESD に関する 1 つの参考となっている理論的枠組みである事から、地域実践と国際的議論の双方から、「ESD の 10 の視点」の限界性・有効性をさらに検討する必要があるだろう。

主な参考文献

- [1] German National Commission for DESD. 2005. *German National plan for action United Nations Decade of Education for Sustainable Development*. pp.1-29.
- [2] Leicht, A. et al. 2006. *Learning Sustainability UN Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014) Stakeholders and Projects in Germany*, German Commission for UNESCO.
- [3] 佐藤真久・阿部治・マイケル・アッチャ, 2008, 「トビリシから 30 年-アームダバード会議の成果とこれからの環境教育」, 『環境情報科学』
- [4] 高雄綾子, 2009, ドイツ ESD の理論と体制, 立教大学 ESD 研究会合配布資料.
- [5] UNESCO. 2005. *United Nations Decade of ESD (2005-14) International Implementation Scheme*. Paris; UNESCO.
- [6] ト部匡司. 2009. ドイツにおける ESD の概念に関する一考察, ESD 地理教材開発科学研究集会, pp.1-5.